

## 農業イノベーションを我々の手で実現させよう

いよいよ農業界も時代は角を曲がり切ったようです。平成26年産米の価格暴落は、マーケットの動向を無視して供給過剰の中でも政治的に高米価を維持し続けてきたことへの反動です。そして、それは起こるべくして起きた事態です。

何度も申し上げているとおり、日本人一人当たりの一日のカロリー摂取量は、1971年に2287キロカロリーでピークに達し、2004年で終戦翌年(1946年)の1903キロカロリーを下回る1902キロカロリーまで落ち、さらに2010年には1849キロカロリーという終戦時に日本人が餓死するといわれたレベルを下回っているのです。

この変化は、単にコメのマーケットの変化だとかコメの消費量の減少などというより、文明の転換というべき変化なのです。

人間は有史以来、欠乏の歴史の中にいました。しかし、我が国では1970年前後を境に、欠乏(空腹)の病理に苦しむ歴史段階から、むしろ過剰(満腹)を原因とする病理にさいなまれる時代が変わったのです。それは、当然のことなが

ら農業の在り様に変化を要求します。同じような変化を遂げたヨーロッパでは70年代、80年代を通じて農業政策を変化させてきました。しかし、我が国の農業政策は、産業界の成長に寄生する形の保護農政を続け、農業界は自らの改革を怠り、保護政策の安楽の中で惰眠をむさぼってきたのです。しかも、ソビエトロシアの失敗を例にするまでもなく、成長した社会では官による過剰な支配はむしろ産業界や人々のモラルを下げてしまうのです。

でもそれを求めたのは農業団体でしょうか、バラマキで農民を釣る政治家たちなのでしょうか。「問うべきは我」ではないでしょうか。

コメの、そしてあらゆる農産物の生産で我が国と諸外国との面積規模の差を語り、自らの弱さを語り、それゆえの保護を求める敗北主義を利権化することはもうやめましょう。我々には日本ならではの生き残り方があるからです。

稲作といっても欧米では畑作と同じけん引式の作業機を使います。我が国で標準的なロータリーハローなどの駆動型作業機に比べ3〜5倍、あるいはそれ以上の高速作業が可能

です。本誌読者の一部は畑作技術体系での水田作業を当たり前のものにしていきます。さらに、子実トウモロコシ生産を行ない、物流コストをかけずに地域の飼料自給を進めれば水田農業にも畜産・酪農にも未来が見えてきます。コメの消費量は800万tでも、我が国のトウモロコシ需要量は最大で1600万tまであるのです。

北海道長沼町の柳原孝二氏と兵庫の養鶏家である奥野克哉氏の取り組みで始まった国産トウモロコシによる耕畜連携は、同じ岩手県花巻市内で盛川周祐氏らと養豚家の高橋誠氏の間でも始まりました。成田のトウモロコシイベントで出会った、瀧島敦志氏、小泉輝夫氏は距離にして20kmしか離れていない茨城県新利根の酪農家、上野裕氏と連携を始めようとしています。

行政や企業の協力はさらに必要になります。でも、政策が変わるから農業が変わるのではなく、農業経営者たちの取り組みこそが農業政策を変化させるのです。

本誌は、耕畜連携を進めるために全国各地に飼料工場を設立するためのお手伝い、農業経営者を顧客とするコントラクター事業の成立を後押ししていくことを考えています。

2015年が皆様にとって輝かしい年になることをお祈りします。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。